

## あらためて見つめなおす『人と人とのつながりの価値』

地球温暖化による気候危機や自然災害の多発、新型コロナウイルスの世界的感染拡大、ウクライナ戦争など、今日私たちは大変な危機に直面しています。その中でDX（デジタルトランスフォーメーション）の導入が進み、私たちの日常におけるつながりにも多くの変化が訪れました。今回のシンポジウムでは、総合地球環境学研究所所長、前京都大学総長の山極壽一氏のトークセッションと、東京大学社会科学研究所教授の玄田有史氏と山極氏の特別対談を通して、時代の転換期で変化する「つながり」について考えました。進行はアナウンサーの渡辺真理氏が務めました。

### ■全労済協会理事長 神津里季生 挨拶要旨

「コロナ禍が3年あまり続き、いろいろな意味で人と人とのつながりが毀損されてきました。今日のシンポジウムはコロナ禍の出口が見えはじめ、つながりの大切さをあらためて噛みしめている中での開催です。大勢の方にお集まりいただいたことを、皆さんと喜び合いたいと思います。シンポジウム開催は、勤労者・生活者の福祉の向上に努める私たちの大切な事業の1つです。今日のテーマについて一緒に考えていきましょう。私自身も登壇者の方々のお話をしっかりと自分のものにしていきたいと思います。」



神津里季生理事長

### ■第1部：トークセッション

第1部は、ゴリラ研究で有名な人類学者であり、総合地球環境学研究所所長、前京都大学総長の山極壽一氏と渡辺真理氏のトークセッション。ゴリラの生態系と人間の進化の中からみえてくる今の人間社会のつながりについて考えました。

#### 家族を知るために始めたゴリラ研究

**渡辺氏** 山極先生はゴリラ研究でたいへん有名ですが、今日は「なぜゴリラか」というところから教えていただけますか。

**山極氏** 学生時代に高校紛争や大学紛争があり、「人間って何か」、今日の主題でもある「人と人とのつながりって一体どうやってできているのだろう」ということを考えるようになりました。その後、大学でサル研究者に出会い「サルを知ることは人間を知ることだ」と言われ、サルに興味を持ちました。人間に近い類人猿には、オランウータン、ゴリラ、チンパンジーがいます。この中でゴリラは、雄1頭に対して雌が複数いる集団で、どうやら家族

的な生活をしているということを知りました。最初は日本ザルの研究をしていましたが、家族ができた理由を知りたかったので、ゴリラの研究をするためにアフリカへ現地調査に行きました。



### 楽しかったアフリカでの現地調査

**渡辺氏** いきなり現地に行くものなのですね。

**山極氏** 行かないことには始まりませんからね。当時はまだ日本にゴリラ研究者はおらず、「ゴリラの調査には価値がある、一緒に森を歩いてくれないか」と現地の人たちを説得するところからスタートしました。もちろん現地のスワヒリ語も覚えて、私と一緒に森を歩いたらおもしろそうだと思ってもらい仲間をつくっていったのです。

**渡辺氏** 単独でいきなりアフリカにいらっしゃって、コミュニケーションを取りつつ調査をするというのは、想像を絶するような苦労があったのではないですか？

**山極氏** いや、楽しかったですよ。仲間とは森歩きや山登りで競争し、一緒にお酒を飲んで騒いで友達になりました。危険を伴うフィールド調査では仲間に「危険を承知でこの人と調査をやりたい」と思わせなければいけません。命を懸けてもいいというつながりをつくるのが、アフリカのジャングルで生き残る方法です。ゴリラって誰にとっても恐いのです。でも、近づかなければ調査になりません。一緒に少しずつ近づいていって、時にはケガもしますが、そうすることによって仲間との絆も深まって、さらにゴリラともお近づきになれる、一石二鳥なのです。

### ゴリラから学んだ家族とは

**渡辺氏** 先ほどゴリラは家族で暮らすとおっしゃっていましたが、どういう家族関係なのですか。

**山極氏** ゴリラの雄は、一度集団を出ると元に戻ることも別の集団に加わることもできません。一方雌は、最初の子どもを産む前に自分の好きな雄を選んで群れを出て集団をつくっていきます。そして、一旦はその雄に身を寄せますが、気に入らなければ他の雄のところへ行ってしまうこともあります。

**渡辺氏** なるほど。なんだか、シンパシーを感じます。

**山極氏** でしょ。家族って元々こうやってできたのではないかというのが私の家族論の出発点です。人間の男もゴリラの雄もパートナーと子どもの両方から認められることで父親になれます。自分の努力だけではなれません。ゴリラの子どもはお乳を吸っている3年くらいは母親に育てられますが、離乳が近づくと父親のそばに身を置くようになります。お父さんゴリラはいさかいが起きれば仲裁に入り、子どもが不安になれば抱きつけて安心感を与えます。その結果、子どもは母親から自立していきます。子どもが離れるとお母さんゴリラは再び自由に動き出します。私は、人間の家族の原型も女性が自由に動ける集団だったのではないかと考えています。いつの頃からか社会が女性の動きを封じてしまいましたが、現在は女性が自由に動き回れるようになり、活躍していますよね。現代の人間社会だけみてもわからないことが、ゴリラを見ているとだんだん想像できるようになるのです。



山極壽一氏

### ゴリラから見える人間社会の進化

**渡辺氏** つまりゴリラを見ていると、自分たちの社会のことがわかってくるのですね。

**山極氏** 人間はゴリラの共通祖先と900万年前に別れ、チンパンジーの共通祖先とは700万年前に別れました。ゲノム上も人間はゴリラよりもチンパンジーに近いのです。でも、人間はゴリラの特徴を持ってチンパンジーの派生特徴を出す前に、チンパンジーから離れて家族をつくりました。そして、熱帯雨林から出て外の環境に適応する過程で人間だけが持つ特徴を現してきました。最初の大きな特徴は二足で歩くことです。人間が暮らすのは地上系の肉食動物がたくさんいる草原。限られた隠れ場所で待つ弱い仲間の食物を自由になった手で運び、一緒に食べるのに役立てたと言われています。直立二足歩行になると俊敏性が弱くなり、足が握る力を失い、なかなか木に登れなくなり、生物として弱くなります。しかし、みんなで食べ物を分け合って食べることで強い生存力をつくっていきました。そして、もう1つ重要になってくる特徴は、人間は他の類人猿に比べて多産であるということです。最近では一人っ子も多いですが、これまでは多子だったため育児の手が必要となり、高齢者がそこで役割を果たすことができました。多子高齢化は「家族」と「共同体」という人間社会の二重構造を支えてきたのです。また、食物や子育てをみんなで分かち合ったことで、共感性が生まれ、動物にはない社会性も備わりました。動物にとって集団は自分の利益を高めるもの。弱まれば集団を離れます。しかし、人間は逆なのです。自分の利益をおとしめても集団のために尽くそうという感性を持っています。それは、子育てをみんなで一緒にやるという習慣から生まれたと思います。さらに、人間は直立二足歩行の姿勢によって、重心が上がり上半身と下半身を別々に動かすことができるようになり、胸への圧力が減り自由な声の発声が可能になりました。そして、言葉を話す前に音楽的な声の力を高め、声を出して仲間と体を

合わせて踊ることで同調し、社会力や共感力をより強化していったのです。

### 言葉が持つ本当の意味

**渡辺氏** 共感というのは、損得ではなく、絆によって生まれてくるものですよね。

**山極氏** そうです、大事なのは気持ちです。これが人と人とのつながりをつくります。そして特徴の最後として、意味をなす「言葉」が生まれます。言葉は音楽的な声によって高まった共感力の先に出現してきたコミュニケーションです。しかし今、我々は誤解しています。



渡辺真理氏

**渡辺氏** 誤解？

**山極氏** 言葉とはあくまでも情報です。しかし、我々は言葉によって体までも共鳴させられると誤解しているのではないのでしょうか。本来ジェスチャーや音楽的な声によって体を共鳴させたり、共同作業をすることで、人と人との絆をつくらなくてはいけないのです。

**渡辺氏** 例えば、「手をつなぐ」という行為は、言葉ではできないですものね。

### 人間は昔のままの社会脳で生きている

**山極氏** おっしゃる通りですね。言葉の発生の話をしたので、人間の脳が大きくなった理由についても話しましょう。人間の進化の99%が言葉の登場前に起こっています。脳が大きくなりはじめたのも200万年前で、言葉が生まれるよりも前のことです。人間の脳が大きくなった背景には、集団の規模を大きくしたことが関係しています。仲間の数を増やしたことで、仲間と自分の関係や仲間同士の関係、将来この関係がどうなるのかという期待、そういうものをすべて記憶に納める収容力が必要になったのです。その後、人間は言葉を話し食料生産をして社会規模を大きくしていきましたが、その間、脳は大きくなっていません。現代人の脳のサイズに匹敵する集団サイズは150人です。この数字はソーシャルキャピタルで、自分がなんらかのトラブルに巻き込まれたり、不安や悩みを抱えたりしたときに相談できる相手の最大値です。また、この人数はかつての人間のように食料生産をせず自然の恵みで生活をしている狩猟採集民の平均的な村のサイズと同じです。つまり、我々は、大昔につくられた社会脳で現在も生きているのです。SNSで何千人、何万人というフォロワーがいたとしても、自分の信頼できる仲間の数は増えていないということなのです。これからは、それを前提にして、利用しながら社会をつくっていく必要があると考えています。

## ■第2部：特別対談

第1部に引き続き山極氏にご登壇いただき、また2004年に「ニート」という言葉を社会に初めて発信された東京大学社会科学研究所教授の玄田有史氏をお招きし、つながりとこれからの社会をテーマに対談を行いました。

**玄田氏** 第1部では家族のつながりについて語っていただいたので、第2部では、友達や知人も含めて、これからの時代のつながりについて考えたいと思います。最近、友達みたいな家族や、親を友達のように感じている人が珍しくないと思います。

### 薄れてきた「3つの縁」

**山極氏** そのような雰囲気生まれたのは、これまで人と人をつなぎとめてきた「3つの縁」が薄れてきたからではないでしょうか。3つの縁とは、血縁、地縁、社縁のことです。私も若い頃、嘱託で会社に勤めていたことがあります。当時は冠婚葬祭の全部を会社が面倒を見てくれました。でも、今はもうそんな会社はありません。今はもう少し緩く、強制されることがない縁が求められています。3つの縁では、仲間の顔を立て、相手の顔を潰さないことが重要です。しかし、今の人々が求めているのはインターネット上の関係のように入りやすく抜けやすいつながりです。それが友達的なつながりに関連しているかもしれません。

### 「絆」という言葉にある2つの意味

**玄田氏** 緩いつながりで思い出しました。震災後よく耳にするようになった「絆」という言葉があります。英語では「Ties(タイズ)」というのですが、大きく分けて2つの意味があるとされています。1つ目はストロングタイズ。3つの縁のような強い絆のことです。戦後や高度成長期の日本社会はまさにストロングタイズ。メンバーといると安心感や幸福感が得られるのが特徴です。



玄田有史氏

2つ目はウィークタイズ。これは先ほどの話にあった緩いつながりにあたります。生きている世界も持っている情報も異なるけれど、たまに会ってお互いに話をするとう共感し合えるというような緩い絆のことです。ウィークタイズには発見や気づきがあり、その中から希望も生まれてきます。どちらか1つではなく、ストロングタイズとウィークタイズの両方を持つことが大切なのです。これまでの日本社会はウィークタイズをあまり重視してきませんでした。そのことが今の生きづらさにつながっているのかもしれない。ちなみに、ゴリラにもウィークタイズってあるのでしょうか？

### 情報革命で失われるもの

**山極氏** ゴリラには1つの集団にしか属さないという原則があります。一方、人間は毎日いろいろな集団を渡り歩いて暮らしています。だからストロングタイズとウィークタイズと使い分けができるのです。もし、ゴリラがウィークタイズをやればのけ者にされるでしょう。今の話だと、ストロングタイズはメンバーシップの均質性を要求する可能性がありますよね。今は強いしがらみ



を嫌う傾向があると同時に、インターネットの影響もあって、個性や多様性が重視される時代になってきています。ところが、私には情報革命のせいで気づかないうちに情報操作され、みんな同じ方向に誘導され均質化されているようにも見えます。人はもともと異なる個性を持っています。そして、異なるものに出会うことで気づきを得ます。しかし、今は情報に出会う時代になり、個性がなくなり十把ひとからげの人になりつつあります。そうなったら、もう人と人が出会う必要はなくなってしまうのです。



**渡辺氏** 第1部で出た「言葉は単なる情報であって、信頼をつなぐものではない」という話を思い出しました。最近、スマホやSNSで簡単に情報を得られます。でも、情報処理に時間を取られて消耗してしまっていて、もう人と会う体力が残っていないという実態もあるように感じます。

### 2種類の情報、「情」と「報」

**山極氏** よく、人の話の80%以上は雑談だと言いますよね。これはすごく大事で、成功談や失敗談、愚痴や噂話を交わすことで、実はソーシャルキャピタルを保持しているのです。情報でありながら人と人をつなぐ手段でもあります。でも、インターネットに溢れているのは、ただの情報でしかないのです。

**玄田氏** 情報にも「情」と「報」の2種類があると言いますよね。「情」は曖昧とか言語化しにくいニュアンスのことで、「報」は正確や確実、客観のことです。物事を1つに決めて捉えるのは危険だと感じています。野球の大谷選手は自身の二刀流スタイルのことを「two way」と仰っています。ストロングタイズとウィークタイズも「情」と「報」も、どちらかではなく two way であることが大切です。それで言えば、「つながり」や「つながりの状態をどう続けていくか」だけでなく、同時に出会いと別れの価値について考えることも大事だ

と思います。出会いや別れによって何が起こるか、その時々で問い直すことで初めて見えてくるもの、感じるがあります。最も辛い別れは死別だと思いますが、死や別れに対して、暗いからという理由で向き合わず、明るい方だけに目を向けていこうというのは、先が厳しいと感じます。

### 「シェアリング」と「コモンズ」がつくる社会

**山極氏** 先ほど情報通信革命やIT社会に対して厳しいことを言いましたが、賢く使えば新しい社会が生まれるとも思っています。それは「シェアリング」と「コモンズ」の社会です。人間は農耕・牧畜を始めたことで移動生活から定住生活になり物を所有するようになりました。そして今は配送システムが揃いなんでも現地調達でき、物を持つ必要がなくなりつつあります。そうなってくると流行るのがシェア。所有が人の価値を決める時代の終わりに私は希望を抱いています。物が不要になれば人に分け、必要になれば人からもらう。つまり、物が人と人をつなぐのです。「コモンズ」は共有地や共有財と訳しますが、一緒に使うことで無駄もなくなり大量生産・大量廃棄も防げます。今SNSでは、「何をしたか」や「どこに行ったか」など「行為」についてみんな投稿しています。今後、行為に対して価値を見出す社会に移行していくというのはどうでしょうか。

### 共感・共鳴を育む3つの「カン」

**玄田氏** その話は、第1部で出た共感・共鳴というキーワードとつながってくると思います。システムとしてシェアリングエコノミーやコモンズをつくったとしても、みんなが共鳴してシステムに魂が宿らなければうまくいかないでしょう。今後の課題は、強制ではないかたちで共感・共鳴をどう広げていくのかということです。私がニートや引きこもりの研究をしていた時、社会に生きづらさを感じている子どもたちと山の麓で共同生活をしている人と知り合いました。その人から、孤独を抱え共感の輪に入れない人でも、3つの「カン」を順番通りに身に付けていくことで、自分の力で生きていけるようになると教わりました。まず、1つ目は感じるの「感」。嬉しいとか悲しいとか悔しいといった感情を表に思いっきり出せるようになることです。2つ目は勘所の「勘」。先生や親に隠しごとがバレない駆け引きや、喧嘩で友だちにケガをさせない範囲などを身に付けることです。それができるようになると、自分自身と向き合ったときに「人生観」や「価値観」などの3つ目の「観」を感じ



られるようになるそうです。この3つの「カン」をみんなが身に付けられるようになると、共感とか共鳴が育まれ、シェアやコモンズの価値を大事にできるようになると思います。そうなれば、今はしんどくても明日が楽しみだと言える社会になっていくのではないのでしょうか。

### 「共助」と「縁助」

**山極氏** 私は自己実現と自己責任の時代は終わったと思いたいです。これからは「共助」の時代です。共助のシステムの例には親子食堂や子ども食堂があります。ここでは誰も儲けようなんて思っていません。みんなが寄り集まって、話しをしながら一緒に食卓を囲んで温かくなろうという行為です。そこに、寄付をしたり食材を持ってきたりする人もいます。これからは、そういう社会をつくらなければいけませんね。

**玄田氏** それで言えば、京都大学の藤原辰史氏の本の中に「縁助」という言葉がありました。セレンディピティとも言いますが、たまたまそこに居合わせたから助けるという行為が広がっていくと、人と人がつながる良さをもっとみんなが実感できるようになっていくと思います。

**渡辺氏** 最後に一言ずつお願いします。

**玄田氏** 今日は人と人とのつながりやその価値というものを考えるきっかけをいただき、大変楽しかったです。ありがとうございました。



### 共感力でつながる社会の大切さ

**山極氏** 人間の脳は「感情」と「知識」の2つの要素からできています。現代の情報通信革命は「知識」を外出し、人工知能がはじき出した期待値によって我々を導こうとしている。しかし「感情」は外出しできないから個人の身体の中に埋まったままです。だが、それを出すことによって我々はつながってきた。情報によってしかつながれない時代だと思い込むのは間違いで、共感力を使ってみんながつながりあわなければいけない時代なのです。言い換えれば、物に心を込めて、物で人と人がつながれる、心を感じるような社会をつくっていくことが大事だと思います。

**渡辺氏** 今日、ご縁を感じて集まってくださった皆様、最後までお付き合いいただき感謝いたします。山極先生、玄田先生、本日はありがとうございました。